

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑩

ゆるやかな筆致で道後の風景を描いたのは、南画家・手島石泉（てしませきせん）である。1852（嘉永5）年に越智郡瀬戸村（現くろ）に生ま

手島石泉が描いた道後

玉の石ゆるやかな筆致

在の今治市上浦町）に生まれ、名は正誼（まさよし）という。

松山藩士であった石泉は、1871（明治4）年の廃藩置県の後、官界に入り、讃岐丸亀警察署長を経て、宇摩郡長を務めた。郡長としての職務のかたわら、川之江の南画家・三好藍石（らんせき、1838～1923年）に師事し、絵画を学んだ。藍石は絵を描く一方で、県会議員や産業開発に取り組んでいたが、その成果を得ることができていなかった。石泉をはじめとする門弟は、そん

石泉は晩年を松山で過ごし、弘願寺で後進の指導にもあたった。1947（昭和22）年、94歳でこの世を去り、愛媛県における南画の最後の担い手と称されている。

淡黄色を基調とした着彩山水画を得意としていた石泉の作品は、独自の表現で描かれており大変印象的である。当館でも彼の作品を収蔵しており、今回は石泉が92歳の時に描いた道後の風景画を紹介したい。

画面右側には3階建ての道後温泉本館が描かれ、2階には休憩している人物が見える。玉の石の近くには、湯かごのような物を持つ着物姿の女性や、これから温泉に入るため本館に向かう人々の姿もある。建物や人々と比較すると、玉の石はずいぶん大きく描かれているが、この誇張表現もまた、作品の魅力のひとつである。



道後温泉・玉の石（県歴史文化博物館蔵）

この道後の風景以外に、松山城や石手寺、三津浜、肱川等、92歳の石泉が描いた作品が残っている。これらについては、またの機会に紹介したい。

（主任学芸員・甲斐未希子）

〈随時掲載します〉